

地震直後も訪問、ネパールで続ける植林活動 自由学園が現地と四半世紀にわたる交流

編集部 発

四半世紀にわたり、ネパールで植林活動を続けている学校法人自由学園（東京都東久留米市）。昨年の2015年には同国をマグニチュード7.8の地震が襲ったため実施が危ぶまれたが、「こんな時こそ」と最高学部（大学部）の学生17人と教員3人の計20人が例年と変わらず現地を訪れた。

団長を務めた専任教員の神明久さん（48）によると、自由学園は高等部の授業の中で1950年以来、埼玉県飯能市などにおける植林活動を続けてきた。その経験を生かして海外でも活動できないかと考え、卒業生の縁を通してネパールを対象地を選び、1990年に植林を始めた。

持続的な利用のために

対象地は、首都カトマンズから東へ約30km、標高1500mを越す高地にあるカブレ地区だ。木々は燃料などに利用され、当初は荒廃した土地も目立った。これまでに5カ所の荒地に植林し、森がよみがえった場所もある。政府が、国有林の管理を地元任せつつ、そこの人々が持続的に利用する仕組み（コミュニティ林業）を導入しようとした時期と重なり、地区営林署、村人の森林管理グループ、地元の学校に自由学園も加わった4者で植林を進める形が整ったという。

自由学園では例年4月に派遣メンバーを決め、5～6月は毎週のように会議を開いて準備を進める。7月中～下旬頃に約3週間のネパールワークキャンプを実施し、植林の他、学校への訪問授業などで現地との交流を続けてきた。

2015年には新メンバーが決まったばかりの4月25日に地震が起こった。学生リーダーを務めた本田光平さん（21）によると、現地状況はなかなかつかめなかったが、情報収集



ある場所の植林前（左、2004年）と植林後（右、2010年）の比較＝写真はいずれも自由学園提供

の上で安全性は確保できると学園が判断し、実施することにした。行ってみるとカブレ地区にも倒壊した建物はあったが、日常生活はほぼ普通に営まれていた。支援のために日本で集めた募金から、いつも訪ねている学校へ設備の補修費を寄付し、子ども一人ずつにはノートとペンを贈った。

7月12～30日の滞在中は、9日間に及ぶ植林を実施。2カ所に約2000本の苗木を植え、1.7kgの種子もまいた。3回目の参加だった本田さんは「これまでも植えた場所だが、苗木の活着率は良くない。試験的な取り組みも含めて、森を増やす方法を考えながら進めている。次の新しい植林予定地を視察する機会もあった」と説明する。

「また来てくれた」

訪問授業は4校で7日間にわたって実施した。学生たちは科学、体操、植林、芸術文化の4グループに分かれて、英語とネパール語でコミュニケーションをとりながら、実験や実技を中心に授業を進めた。2度目の参加となった櫻井真帆さん（19）は「続けて行くと、子どもたちは覚えていて『また来てくれた』と声をかけてくる。私たちが行けるのは1年のうちの3週間だけ。村の人たちと一緒に森を育てていくためにも、いろんな交流を重ねる意味は大きい」と言う。

ネパールワークキャンプは、第31回（2015年度）東京キワニスクラブ青少年教育賞最優秀賞を受けた。今後も最高学部の取り組みとして続ける予定だ。団長の神さんは「村の人たちも私たちも、植林によって土地が変わっていくことをお互いに学び合っている。今では、このワークキャンプに参加したいからと進学してくる学生もいます」と話している。



木の少ない斜面での植林作業



苗木を1本ずつ植えていく